

海外舞踊文献紹介

1995年以降に海外で出版された舞踊研究書の中から、筆者の専門であるバレエ史研究書の一部を、扱っている時代の順に紹介する。

Dance and Music of Court and Theater: Selected Writings of Wendy Hilton, 456 p., New York, Pendragon Press, 1997.

バロック・ダンスに関する基本文献の一つだったWendy Hilton, *Dance of Court & Theater: The French Noble Style 1690-1725* (Princeton, 1981) がいつのまにか絶版になったと思っていたら、この増補新版が出た。旧著のファクシミリ復刻に、3つの論文が付されている。ルイ14世がどのような音楽に合わせてどのような踊りを踊っていたのか、そのいわゆるフランス優雅様式の特徴は何か、それはどのような記譜法で記録されているか、といったテーマについて概括的かつ具体的に論じた本である。

Ivor Guest, *The Ballet of the Enlightenment: The Establishment of the Ballet d'Action in France, 1770-1793*, 456 p., London, Dance Books, 1996.

アイヴァ・ゲストはバレエ史研究、とくに19世紀バレエ研究の第一人者である。*The Romantic Ballet in Paris, The Ballet of the Second Empire, The Romantic Ballet in England* といった彼の主著はいずれもバレエ史研究者にとっては基本文献であり、19世紀バレエについて何か調べるときにはゲストのお世話にならないわけにはいかない。ゲストは上記をはじめ、30冊近くの著書を出版しており、そのなかには *Adventure of a Ballet Historian* という自伝もあるが、本書はそのゲストの最新著。資料収集に30年、執筆に5年かかったという。副題にもあるように、バレエ・ダクシオンがいかにして成立したかというのがテーマであり、「啓蒙の時代」に呼応してバレエがどのように変化していったのかを、パリにあるいくつかのアルシーヴの資料に基づいて、ヴェストリス（父）、ノヴェール、マクシミリアン・ガルデル、ピエール・ガルデル、ドベルヴァルの5人の仕事を通じて実証していく。

Susan Leigh Foster, *Choreography & Narrative: Ballet's Staging of Story and Desire*, 372 p., Bloomington & Indianapolis, Indiana U. P., 1996.

フォスターは、舞踊をいかに「読む」かについ

て論じたかの名著 *Reading Dancing Bodies and Subjects in Contemporary American dance* の著者として名高いが、旧著のテーマがアメリカのコンテンポラリー・ダンスだったのにたいし、本書のテーマは18世紀から19世紀初頭のバレエである。つまり上記のゲストの本とはほぼ同じ時代を扱っている。物語バレエがどこから生まれ、どのような発展を遂げて、ロマンティック・バレエを生むにいたったかについて、政治・経済的変化と関連づけつつ、また「踊る身体」を、社会の中でさまざまに制度化されていった身体と対照させながら、論証していく。キー概念となるのは choreography であり、これは踊る身体・見る身体の理論的実践と定義される。じつに刺激的な本である。

上記のゲストの本と併せ読むと、舞踊史のなかで、ここ数年、最も目覚ましい研究成果を挙げている分野が、ロマンティック・バレエ前史であることがよくわかると同時に、舞踊史におけるいわゆるイギリス学派とアメリカ学派との違い、すなわち前者の徹底的実証・記録主義と、後者のイデオロギー批判との違い（たとえば、同じバレエ・リュス研究でも、バックルとガラフォラがいかに違うかを思い出してみしてほしい）が、笑ってしまうほどよくわかる。

Lynn Garafola (ed.), *Rethinking the Sylph: New Perspectives on the Romantic Ballet*, 288 p., Hanover and London, Wesleyan U. P., 1997.

これは国際舞踊史学会 (Society of Dance History Scholars) の年報でもある。編者はいうまでもなく名著中の名著 *Diaghilev's Ballets Russes* の著者である。『ラ・シルフィード』『ジゼル』に対する新しい視点からの論考の他、ロマンティック・バレエにおける民族舞踊、女性解放との関連、カルロ・ブラジス、ワルシャワ・ヴィエルキ劇場のバレエダンサーたち、ローマで上演されていたバレエ、サルヴァトーレ・タリオーニなど、周縁的なテーマに関する論考が10本収録されている。このようなロマンティック・バレエへの新しい視点からの研究もまた世界的トレンドである。編者の序文にあるように、ロマンティック・バレエの研究にはいわば双眼的・両面的な視点が必要である。というのも、ロマンティック・バレエはパリだけのものではなく、一つの国際的な芸術運動で、国民的・民族的多様性を示していると同時に、バレエ・ブランに象徴される明確な特徴をもっているからである。

Knud Arne Jurgensen, *The Bournonville Tradition: The first fifty years 1829-1879*, 2 volumes, 201 p. + 468 p., London, Dance Books, 1997.

1987年に刊行開始された全4巻のシリーズの最終巻である。ちなみに既刊3巻は、*The Bournonville Ballets: A Photographic Record, The Bournonville Heritage* (with Ann Hutchinson Guest), *Bournonville Ballet Technique: 50 Enchainements* (with Vivi Flindt)。1冊目は図像学的研究で、2冊目と3冊目は技法研究だった(2冊目にはピアノスコアが、3冊目にはピアノスコアとビデオが付されている)。いずれもかなり個別的な研究だったが、4巻目である本書の第1巻はブルノンヴィルの伝記で、歴史的背景、バレエ史上の位置、後代への影響だけでなく、私生活、宗教観といったブルノンヴィルの個人的な事柄をも詳しく扱っている。本書の特色は、最近発見されたブルノンヴィルの自筆原稿を主要資料にしていることで、ありがたいのはその中の重要な部分が英訳・引用されていることである(ちなみに第2巻はブルノンヴィルの全作品の詳細な解説とビデオである)。

Knud Arne Jurgensen, *The Verdi Ballets*, 398 P., Parma, Instituto Nazionale di Studi Verdiani, 1995.

上記と同じユルゲンセンの著書。かなり特殊専門的な本である。というのも、オペラにおけるバレエは、オペラ研究者からもバレエ研究者からも軽視されていて、本格的な研究は少ない。しかし、そもそもオペラの発生以来、オペラとバレエは切っても切れない関係にあったわけだし、バレエ史における『悪魔のロベール』の位置を考えてみてもわかるように、けっして疎かにしてはならない分野である。その意味で、貴重な研究である。

ユルゲンセンはヴェルディの書いた、『アイダ』『オテロ』など8つのオペラにおけるバレエ音楽について、スコアの分析だけでなく、振付、美術・衣装、さらには舞台評をも視野に入れて、当時のいわゆる「第二帝政期バレエ」におけるヴェルディのバレエ曲の位置づけを試みている。

Roland John Wiley, *The Life and Ballets of Lev Ivanov: Choreographer of the Nutcracker and Swan Lake*, 306 p., Oxford, Clarendon Press, 1997.

ワイリーはチャイコフスキーの音楽研究の第一人者。チャイコフスキーの3大バレエについて何か書こうとしたら、彼の*Tchaikovsky's Ballets* (1985)を参照しないわけにはいかない。実際、多くの人がこれをタネ本にしていることは周知の事実。本書はそのワイリーによるイワノフ研究であり、これまで「謎に包まれた振付家」と呼ばれてきたイワノフに関する初めてのまとまった研究である。前半4分の1ほどが伝記で、あとは作品

研究である。『くるみ割り人形』や『白鳥の湖』はもちろん、『ハーレムのチューリップ』や『ミカドの娘』(ギルバート&サリヴァンのオペラのバレエ化)などについても詳しい言及がある。

Galina Dobrovolskaya, *Shchelkunchik: Shchedevry baleta*, 200 p., Sankt-Peterburg, MOL, 1996.

デミドフの『白鳥の湖』(1985)、コンスタンチノフの『眠れる森の美女』(1990)に続く、『くるみ割り人形』の研究書。これで3大バレエの研究書がそろったわけである。現在のロシアの政治・経済的混乱から察するに、今後、『ジゼル』その他の研究書が続刊されるのかどうかは予測できない。

本書は、『くるみ割り人形』の成立の背景や経過だけでなく、その後のさまざまな改訂版に関する記述も細かい。とくに、我が国ではあまり知られていないゴルスキー版やロプホーフ版(キャバレーのレビューのスタイルを取り入れた)に関する記述は貴重である。図版も興味深い。ロシアの本が往々にしてそうであるように、不鮮明であるのが残念。

(鈴木 晶)

平成9年度 舞踊学関係博士論文題目

博士論文題目	氏名	大学院名
・宮古路節の基礎研究	伊坂 正海	日本大学大学院芸術学研究所

平成9年度 舞踊学関係修士論文題目一覧

修士論文題目	氏名	大学院名
・ワガノワ・バレエ・アカデミーでの教育にみる口頭伝承性—キャラクター・ダンスを例に—	伊藤 友子	大阪大学文学研究科
・ピナ・バウシュの舞踊について—コレオグラフの視点を中心に—	古後奈緒子	大阪大学文学研究科
・身体表現としての仏舞研究	遠藤 綾乃	お茶の水女子大学大学院
・体幹可動域(柔軟性)の加齢変化と筋調整の役割	大野 初江	お茶の水女子大学大学院
・回転系マット運動の習熟過程—高校生における伸膝前転を題材にして—	鈴木 千種	お茶の水女子大学大学院
・ダンスセラピーにおけるKestenber g Movement Profile研究	達 さつき	お茶の水女子大学大学院
・舞踊作品鑑賞時における情動性自律反応—皮膚電気反射を中心に—	長尾 幸子	お茶の水女子大学大学院
・バレエ教授に必要な知識に関する研究—日本のバレエ教師の認識—	井出 眞理	お茶の水女子大学大学院
・能における演者の眼	原 郁子	お茶の水女子大学大学院
・韓国現代舞踊における韓国様式の模索と創造—主要舞踊家の舞踊観と作品を中心に—	崔 柄珠	お茶の水女子大学大学院
・ビデオ鑑賞によるダンス学習の効果	吉田 裕子	筑波大学大学院体育研究科
・ダンスパフォーマンスにおける充実感に関する研究	瀧本 眞理	筑波大学大学院体育研究科
・クラシックバレエ受講者の意識に関する因子分析的研究—成人初心者クラスを対象として—	和田 美保	筑波大学大学院体育研究科
・中国の芸術体操教育にみる舞踊的要素についての一考察	趙 増玉	筑波大学大学院体育研究科
・モダンダンスにおける「表現運動の最小単位」の認識に関する研究	青木 織香	日本女子体育大学大学院
・高校体育における「リズム型ダンスの授業」の楽しさについて	多田 五月	日本女子体育大学大学院
・即興舞踊における自己観察とその効果についての研究	遠藤亜希子	日本女子体育大学大学院
・舞踊、その古典と近代	岡野谷雅子	日本大学大学院芸術学研究所
・新舞踊における教育的効果	須藤 衛人	日本大学大学院芸術学研究所
・19世紀~20世紀における舞踊表現考察	千竈 晃子	日本大学大学院芸術学研究所
・ウケにみる芸能の起源	野口 千里	日本大学大学院芸術学研究所
・異次元における滝夜叉の表演	村瀬 克二	日本大学大学院芸術学研究所
・作品主題と象徴—『瀕死の白鳥』における一考察—	山谷 育代	日本大学大学院芸術学研究所
・日中伝統劇における演技表現の一考察	楊 蕙麗	日本大学大学院芸術学研究所
・ダンスと視線	稲田奈緒美	早稲田大学大学院文学研究科

修士論文題目	氏名	大学院名
・ダンスの発生と時間論 ーダンスは何処に生じるかー	北村 明子	早稲田大学大学院文学研究科
・電子メディア時代におけるパフォーマンスと身体	津田 貴司	早稲田大学大学院文学研究科
・1923年初演のバレエ《Les Noces》の成立過程を巡って	恒川 朝子	早稲田大学大学院文学研究科
・バレエ作品におけるダンサーの記号的考察	野本 昌	早稲田大学大学院文学研究科
・坪内逍遙と R. Wagner ～明治30年代における楽劇の受容の展開について	安田 雅信	早稲田大学大学院文学研究科

(以上、平成10年9月30日までにご回答いただいた該当論文を掲載した。)

『舞踊学』投稿規定

1. 投稿資格は、舞踊学会会員とする。
2. 投稿内容は、未発表の、舞踊学関係の論文・研究報告・資料紹介とする。
3. 投稿論文は、完結したものとする。
4. 投稿原稿は、編集委員会において採否を決定する。
5. 原稿は、日本語により、横書とする。ただし外国語の単語、英文の引用は例外とする。
6. 原稿枚数は、400字×50枚を限度とする(図表を含む)。ただし、研究報告は、400字×30枚以内(図表を含む)。
7. 原稿には、執筆者名・表題のローマ字表記を付し、さらに英文の表題を付する。
8. 原稿は、完全原稿であること、図・表は、版下になりうるもの。欧文の引用はタイプによることを原則とする。
9. 原稿には、コピー3部を添付する。コピーによる不鮮明な図・表は原図2部を提出する。
10. 原稿料は支払わない。
11. 原稿締切は、その年度の3月31日とする。
12. 原稿の提出先は、舞踊学会事務局とする。
13. 上記以外のことで、本誌に関する事柄については、編集委員の決定に委ねる。

以上
[平成10年9月改訂]

編集委員会

編集委員

尼ヶ崎 彬 石田 久美子 大貫 秀明 國吉 和子
頭川 昭子 丸茂 祐佳 ○目代 清 ○印委員長

舞踊学 21号	
平成10年10月25日印刷 平成10年10月30日発行	
編集・発行 舞 踊 学 会	
事務局	〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学・演劇研究室内 TEL 03(5286)3631 FAX 03(3203)7718
印刷所	(株)美巧社 東京支社 〒112-0002 東京都文京区小石川2-2-14 TEL 03-3813-8231